

平成31年度

公立高等学校入学者選抜

## 学力検査結果活用ガイド

～学習内容の確実な定着に向けて～

山梨県教育委員会

# 目 次

I 調査の概要	-----	1
II 総合得点（全教科の合計点）の調査結果概要	-----	1
III 教科別調査結果の概要		
国、語	-----	3
社 会	-----	7
数 学	-----	11
理 科	-----	15
英 語	-----	19

## I 調査の概要

### 1 調査の目的

平成 31 年度山梨県公立高等学校入学者選抜のために実施した学力検査の成績結果の調査・分析を通して、本県公立高等学校志願者の学力の実態を把握し、本県中学校及び高等学校の教科教育を充実させるための資料とすることを目的とする。

### 2 学力検査実施日、調査教科

平成 31 年 3 月 5 日 (火)

国語 (55 分)	9 : 30～10 : 25
社会 (45 分)	10 : 40～11 : 25
数学 (45 分)	11 : 40～12 : 25
英語 (45 分, うち「リスニング」約 12 分)	13 : 30～14 : 15
理科 (45 分)	14 : 30～15 : 15

### 3 調査対象者

全日制公立高等学校入学者選抜検査の全教科 (5 教科) を受検した者全員 4,106 人 (男子 2,153 人, 女子 1,953 人) を対象としている。

なお、正答率調査については、上記受検者の中からの抽出者を対象としている。抽出人数は、411 人で、全体に占める抽出者の割合はおよそ 10% である。なお、対象者の抽出に当たってはすべての高等学校での受検者を対象に、その受検高等学校の受検者数に応じて、男女に関係なく、無作為に抽出した。

## II 総合得点 (全教科の合計点) の調査結果概要

### 1 出題のねらい、配慮事項

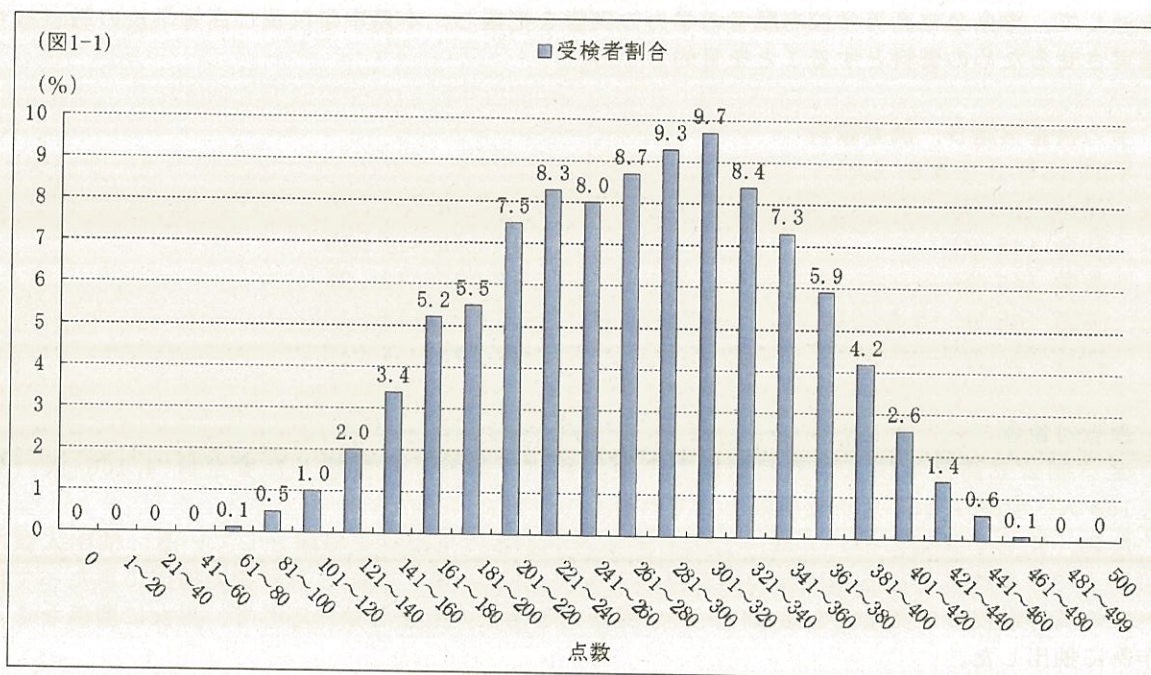
- ① 中学校学習指導要領に示されている各教科の目標及び内容に即して、基礎的・基本的な事項を重視するとともに、それらを活用する力を検査することができるように出題した。
- ② 当該教科の各分野、領域及び事項にわたって偏りのないように出題した。
- ③ 単に記憶の検査に偏らないように配慮し、思考力、判断力、表現力を検査することができるように工夫した。
- ④ 全県的な視野にたって出題し、地域差による影響が生じないようにした。
- ⑤ 特定の教科書等の使用者が有利になることのないようにした。

### 2 総合得点および教科別平均点、最高点、最低点

	総合得点	国語	社会	数学	理科	英語
平均点	276.6	59.4	53.9	55.6	51.5	56.2
最高点	476	96	98	100	100	100
最低点	59	12	3	3	3	6

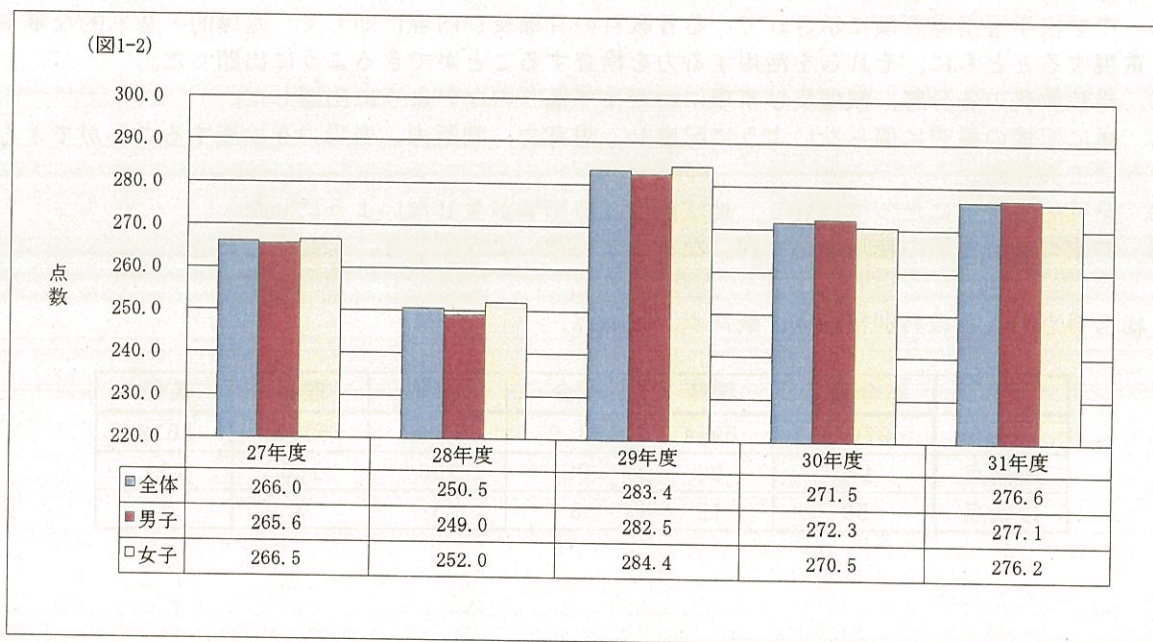
### 3 総合得点の得点分布

総合得点の平均点は 276.6 点で、前年度より 5.1 点高かった。得点分布は（図 1-1）に示すとおりである。



### 4 総合得点の平均点の推移

平成27年度から今年度入試まで5年間の全体平均は（図1-2）のように推移している。





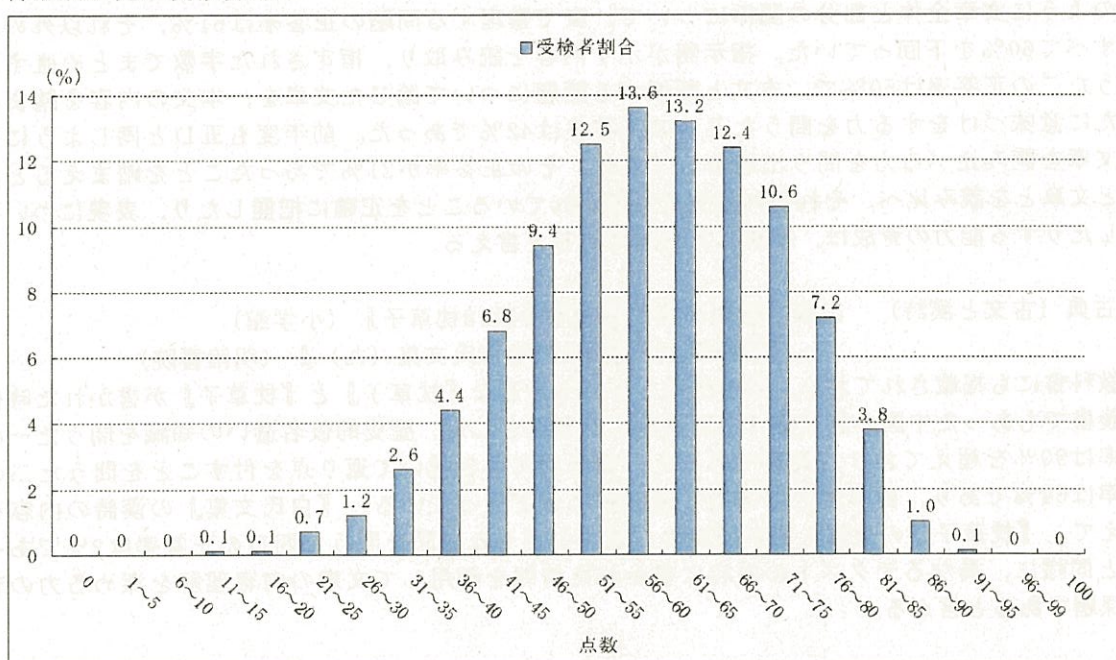
### Ⅲ 教科別調査結果の概要

#### ○ 国 語

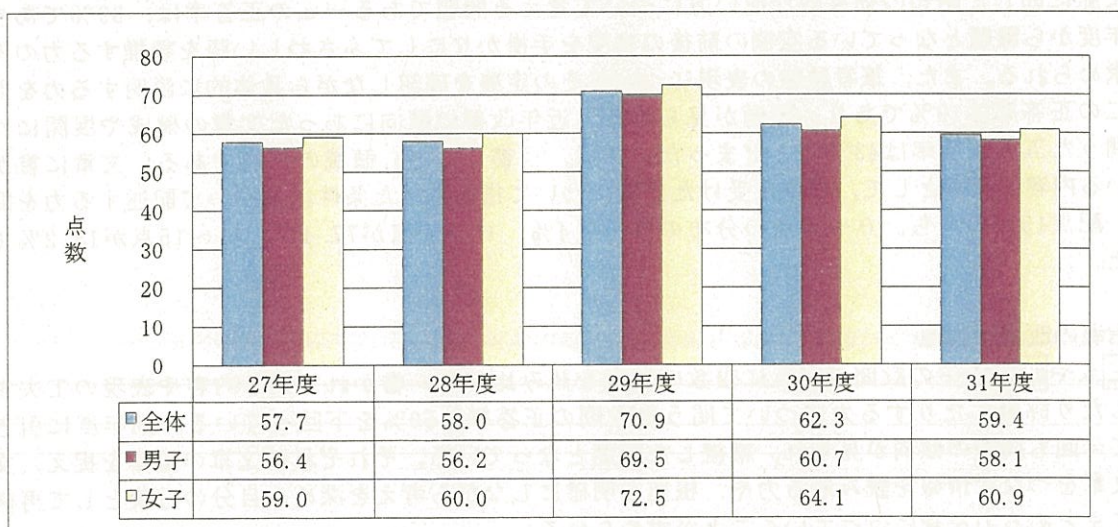
##### 1 出題のねらい、配慮事項

- ① 「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の内容を網羅し、基礎的な学力を測ることができる問題構成となるよう配慮した。
- ② 「話すこと・聞くこと」に関しては、プレゼンテーションの場面を取り上げ、相手の立場・考えを尊重して自分の考えを話す力、資料を活用して話す力を測ることができるよう配慮した。
- ③ 古典については、古文と漢詩を現代語訳と併せて提示し、文章を読み比べながら作品に表れたものの見方や考え方に触れ、伝統的な言語文化に親しみを持てるよう配慮した。
- ④ 説明的な文章については、「自然」に関する西洋人と日本人の捉え方の違いについて論じた評論文を選定し、内容や論理展開を問うとともに、同じく「自然」について論じた異なる筆者の文章を本文の記述をもとに意味づけることで文章の理解を深めることができるよう配慮した。
- ⑤ 文学的な文章については、詩作をめぐる筆者の考えを綴った随筆を選定し、筆者の考えをたどりながら、書かれた内容や表現の工夫を読み取る力を測ることができるよう配慮した。

##### 2 得点別に見た度数分布



##### 3 平均点の推移



#### 4 大問別の内容と調査結果の分析

##### ㊦ 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（漢字の読み書き・漢文の訓読に関する知識）

一、二では、基本的な常用漢字の読みと書き取りを出題した。概ね正答率は高く、学習指導要領で求めている漢字の知識は身に付いていると考えられる。三では、俳句の表現について出題し、正答率は73%であった。82%であった前年度の書写と比べると10ポイントほど低かった。

##### ㊧ 話すこと・聞くこと

相手や場に応じて表現を工夫する力を問う問題である一は正答率が85%を超えており、概ね良好と言える結果であった。一方、二のように資料を工夫して効果的に話す力を問う問題の正答率は51%、三のように資料を活用して指定された字数で表現する力を問う問題の正答率は37%であった。前年度も資料を効果的に活用する力を問う問題を出題したが、正答率は57%であった。資料から必要な情報を精査・解釈する力や精査・解釈した内容を表現する力に課題があると言える。

##### ㊨ 説明的文章 出典『雑草が教えてくれた日本文化史』稲垣栄洋（エイアンドエフ）

一のように段落相互の関係を理解し、接続詞の働きを問う問題の正答率は90%と良好であった。三のように文章全体と部分の関係について、表で整理する問題の正答率は61%、それ以外の設問はすべて60%を下回っていた。指示語が示す内容を読み取り、指定された字数でまとめ直す力を問うた二の正答率は50%で、本文と類似する話題について論じた文章を、本文の内容を踏まえて新たに意味づけをする力を問うた五Dの正答率は42%であった。前年度も五Dと同じように複数の文章を読み比べる力を問う出題をしており、その正答率が21%であったことを踏まえると、文章と文章とを読み比べ、それぞれの文章に書かれていることを正確に把握したり、表現について評価したりする能力の育成は、継続した課題であると言える。

##### ㊩ 古典（古文と漢詩） 出典『新編日本古典文学全集18枕草子』（小学館）

『新釈漢文大系第105巻白氏文集（九）』（明治書院）

教科書にも掲載されており、受検生にとっても身近な『枕草子』と『枕草子』が書かれた時代の教養書でもあった中国の詩文集『白氏文集』を題材とした。歴史的仮名遣いの知識を問うた一の正答率は90%を超えており、良好であった。前年度に引き続いて返り点を付すことを問うた二の正答率は64%であり、前年度とほぼ同じ正答率にとどまっている。『白氏文集』の漢詩の内容を踏まえて、『枕草子』の登場人物が漢詩の一部を引用した意図を問うた四Dの正答率は2%であった。㊦と同様に、異なるテキストの内容に書かれた情報を活用して文章の内容理解を深める力の育成は課題であると言える。

##### ㊪ 文学的文章 出典「種まく人」若松英輔（亜紀書房）

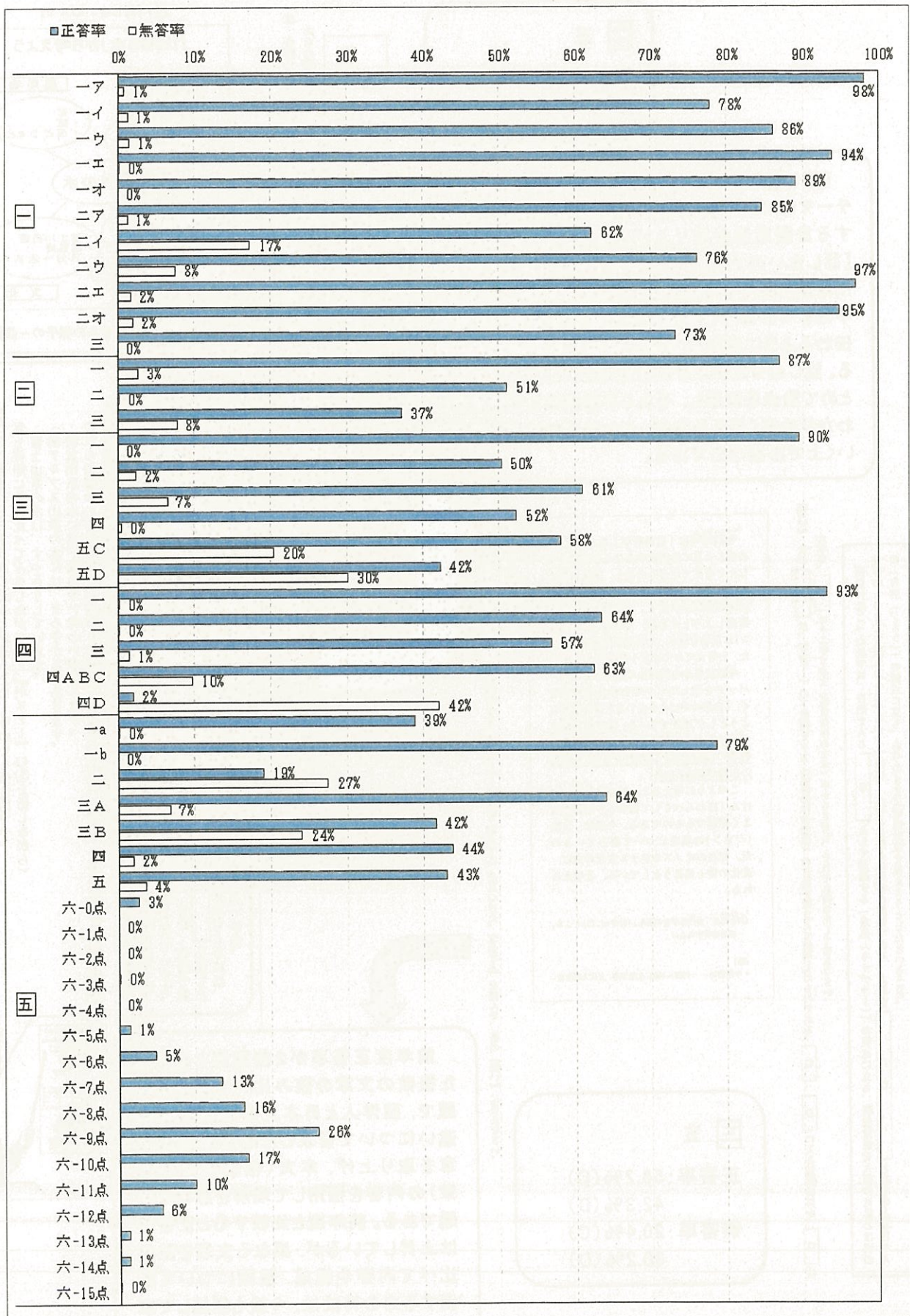
文脈に即した語句の効果的な使い方について考える問題である一aの正答率は、39%であり、前年度から課題となっている空欄の前後の表現を手掛かりにしてふさわしい語を類推する力の育成が求められる。また、筆者独特の表現についてその定義を確認しながら具体的に説明する力を問うた二の正答率は19%であり、課題が見られる。近年改善の傾向にあった文章の構成や展開について問うた五の正答率は43%にとどまった。六は、「書くこと」領域の出題である。文章に書かれている内容を契機として、影響を受けた言葉について指定された条件に基づいて記述する力を問うた。配点15点のうち、0～5点の分布の計が4.4%、6～10点が77.4%、11～15点が18.2%であった。

#### 5 指導の改善の視点

㊦や㊧や㊨や㊩や㊪の中の設問のように複数の文章を読み比べて、書かれている内容や表現の工夫を理解したり評価したりする力について問うた設問の正答率は50%を下回っている。前年度に引き続いて今回も同様の傾向が見られ、継続した課題となっている。それぞれの文章の論旨を捉え、文章と文章をつなぐ情報を読み取る力や、根拠を明確にしながら考えを深め、自分の言葉として再構成してまとめる力を身に付けていくことが求められる。



6 平成31年度 正答率調査結果 (国語)



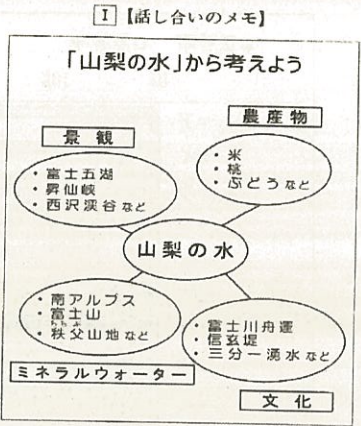


三  
正答率: 37.2%  
無答率: 7.8%

【話し合いのメモ】を踏まえて「山梨の水」というテーマについてまとめたことを、プレゼンテーションする言語活動が取り上げられている。資料となる【話し合いのメモ】がプレゼンテーションでどのように活用されているのかということを理解した上で、不足している要素を聞き手である小学校5年生に伝わるように自分の言葉で表現する力が求められる。話し合ったり自分で考えたりしたことをメモにまとめて論点を整理し、それらを構造化して聞き手にわかりやすく伝える力は、これからの社会を生きていく上で必要な力である。

三 春野さんは、Ⅲ「リハーサルの様子の一部」の部分で、Ⅰ「話し合いのメモ」を踏まえて「山梨の水」と自然や文化との関わりについて話している。あなたが春野さんなら、Aでどのように話すか。次の1、2の条件に従って書きなさい。

条件 1 Ⅰ「話し合いのメモ」の言葉を使って、Aに出ているように書くこと。  
2 十字以上、十五字以内で書くこと。



Ⅲ【リハーサルの様子の一部】

※

みなさんもミネラルウォーターを飲んだことがあると思います。このミネラルウォーターの生産量が、日本で一番多いのが山梨県です。知っていましたか。山梨県の秀麗な山々が育むミネラルウォーターはどれもおいしいのですが、産地によってそれぞれ含まれるミネラルの量などが違うため、味わいも個性的です。私も実際に飲み比べてみました。Ⅱ「ボスター」の①を指しながら

- ・富士山系の水は、すっきりしています。
- ・南アルプス山系の水には、まろやかさがあります。
- ・秩父山系の水には、軟らかい味わいがあります。

これらの味わいの違いは、「硬度」と関係があります。今回、私が飲み比べをした水の「硬度」をまとめて、このようになります。(Ⅱ「ボスター」の②を指す)

「硬度」が表示されています。みなさんもラベルの栄養成分表示などで確認してみてください。「山梨の水」は、ミネラルウォーターのほかにも、私たちに多くの恵みを与えてくれています。富士川の流れる、富士川舟遊として文化の発展にも大きな影響を与えています。また、季節で表情を変える富士五湖などの景観は目を、夏から秋に旬を迎える。A 季節で表情豊かな水と暮らしを支えてくれる自然を大切にすることも忘れないでいたいですね。

五 山村さんは本文のテーマに関連する資料を図書館でさがし、次の「文章1」を見つけた。「文章1」を読んで、後の「問い」に答えなさい。

「文章1」(・は注を示す)

今西錦司は「自然科学」は、「ジネンの学」としても成立することを明らかにしたと考えてはどうだろう。西洋に起こった科学は、自然に向かうときも「科学」に足場を置きすぎて、シゼン(nature)を研究しようとするが、今西は自然(ジネン)に足場を置き、それを研究しようとした。と調べてみよう。

今西は自分の研究法の出発点として、バッタを殺してビンでとめるのではなく、「自然の中に生きている」姿を研究しようとしたと述べている。前者の方法は「科学」から出発しようとしているが、後者の態度には、「自然(ジネン)」からの出発が認められる。

このように考えると、後の進化論における「変わるべくして変わる」の言葉もよく理解できるのである。今西は、自然(ジネン)の現象について語っているのだ。存在のオノズカラナル変化の力に、進化の姿を見ようとしている。と考えられる。

(河合隼雄「自然科学者の誕生」『科学』vol.73)による。一部省略等がある。

(注)  
・今西錦司……1902~1992。生態学者 文化人類学者。

「問い」 次の「文章1」の下線を本文(稲垣栄洋の文章)の言葉で踏まえて説明したものである。六字で、Dは十字で本文(稲垣栄洋の文章)の中からさがし、それぞれ抜き出して書きなさい。

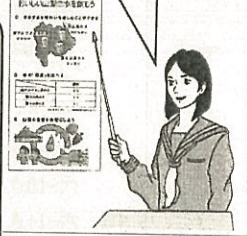
Cとして認識する「自然(ネイチャー)」の視点に立ち、研究対象を人間の世界とは別の「自然(ジネン)」の視点に立ち、ありのままに研究対象を捉えようとしたということ。

Dは十字で本文(稲垣栄洋の文章)の中からさがし、それぞれ抜き出して書きなさい。

C、Dに入る言葉は何か。Cは

五  
正答率: 58.2% (C)  
42.3% (D)  
無答率: 20.4% (C)  
30.2% (D)

前年度正答率が2割程度と低かった複数の文章の読み比べに関する出題で、西洋人と日本人の「自然」観の違いについて言及した河合隼雄の文章を取り上げ、本文(稲垣栄洋の文章)の内容を援用して理解を深める問題である。前年度と比較すると正答率は上昇しているが、異なる文章を読み比べて内容や構成、展開について評価する力の育成は、今後も継続して求められる。



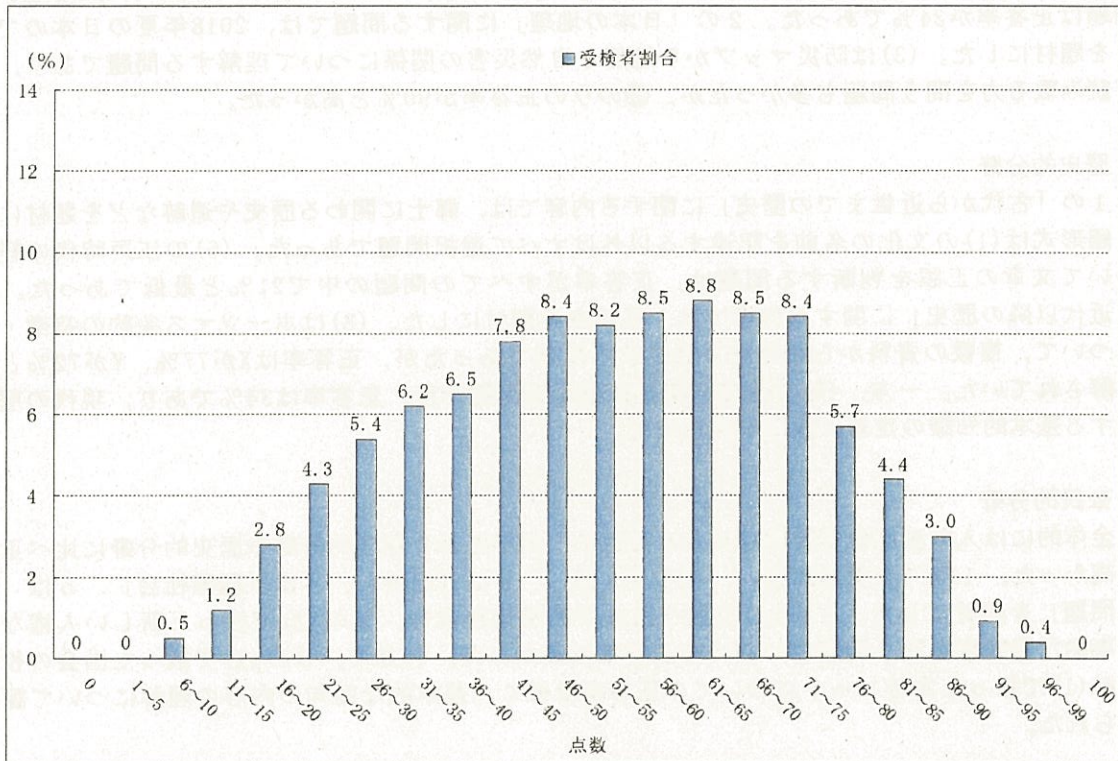


## ○ 社 会

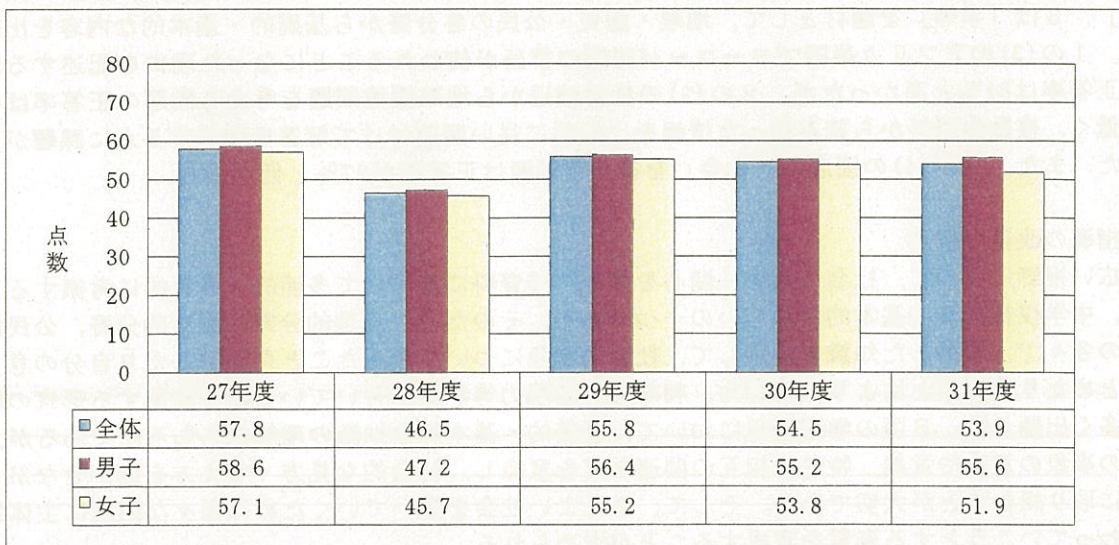
### 1 出題のねらい，配慮事項

- ① 中学校における地理的分野，歴史的分野，公民的分野の三つの分野にわたって，基礎的・基本的な学力が定着しているかを検査した。
- ② 地図，図，表，グラフなどの資料を活用して，多面的・多角的に思考したり，判断したり，表現したりする力を問うようにした。
- ③ 中学校学習指導要領の趣旨に基づいた出題とするとともに，身近な地域である山梨に関する題材をできるだけ取り入れるように配慮した。

### 2 得点別に見た度数分布



### 3 平均点の推移



#### 4 大問別の内容と調査結果の分析

大問の構成は、例年と変わらない。全体を通じて、定められた条件の中で表現する問題については改善が見られたが、複数の資料を用いたり、図やグラフを読み取って判断したり、自分の言葉で表現することについては課題が残る。また、基礎的・基本的な知識を率直に問う問題（空欄補充や一問一答形式）については正答率に偏りがあり、分野により学習内容が定着に至っていない点が見受けられる。

##### 1 地理的分野

1の「世界の地理」に関する問題では、2018年FIFAワールドカップに出場した国々が所在する州の地域的特色を題材にした。(2)の中東地域の人々が信仰している割合が高い宗教としてイスラム教を答える問題は90%と高かった。一方、(3)の北アメリカ州に位置する山脈・河川を選択する問題は正答率が24%であった。2の「日本の地理」に関する問題では、2018年夏の日本のできごとを題材にした。(3)は防災マップから地形と自然災害の関係について理解する問題であり、地図を読み取る力を問う問題も多かったが、②のウの正答率が90%と高かった。

##### 2 歴史的分野

1の「古代から近世までの歴史」に関する内容では、郷土に関わる歴史や遺跡などを題材にした。出題形式は(1)の文化の名前を記述する以外はすべて選択問題であった。(6)の江戸時代の経済について文章の正誤を判断する問題は、正答率がすべての問題の中で21%と最低であった。2の「近代以降の歴史」に関する内容では、略年表を題材にした。(3)はポーツマス条約の特徴・影響について、複数の資料から読み取り記述する問題であったが、正答率はXが77%、Yが72%とよく理解されていた。一方、(5)の冷戦の構造に関する問題では、正答率は34%であり、現代の歴史に関する基本的知識の定着に課題が見られた。

##### 3 公民的分野

全体的には入試直前の学習内容であるだけに、例年どおり地理的分野や歴史的分野に比べ正答率は高かった。1は「少子高齢化」、2は「人権」、3は「国会」、4は「国際社会」、5は「消費者問題」を題材にした。1の(2)で扱った少子高齢化社会や、2の(2)で扱った新しい人権などの時事的な諸課題を問う問題についての正答率は高かった。一方で、3の(1)で扱った国会の役割、4の(1)で扱った為替レートについての正答率は低く、基本的な語句の内容の理解について課題が見られた。

##### 4 三分野総合

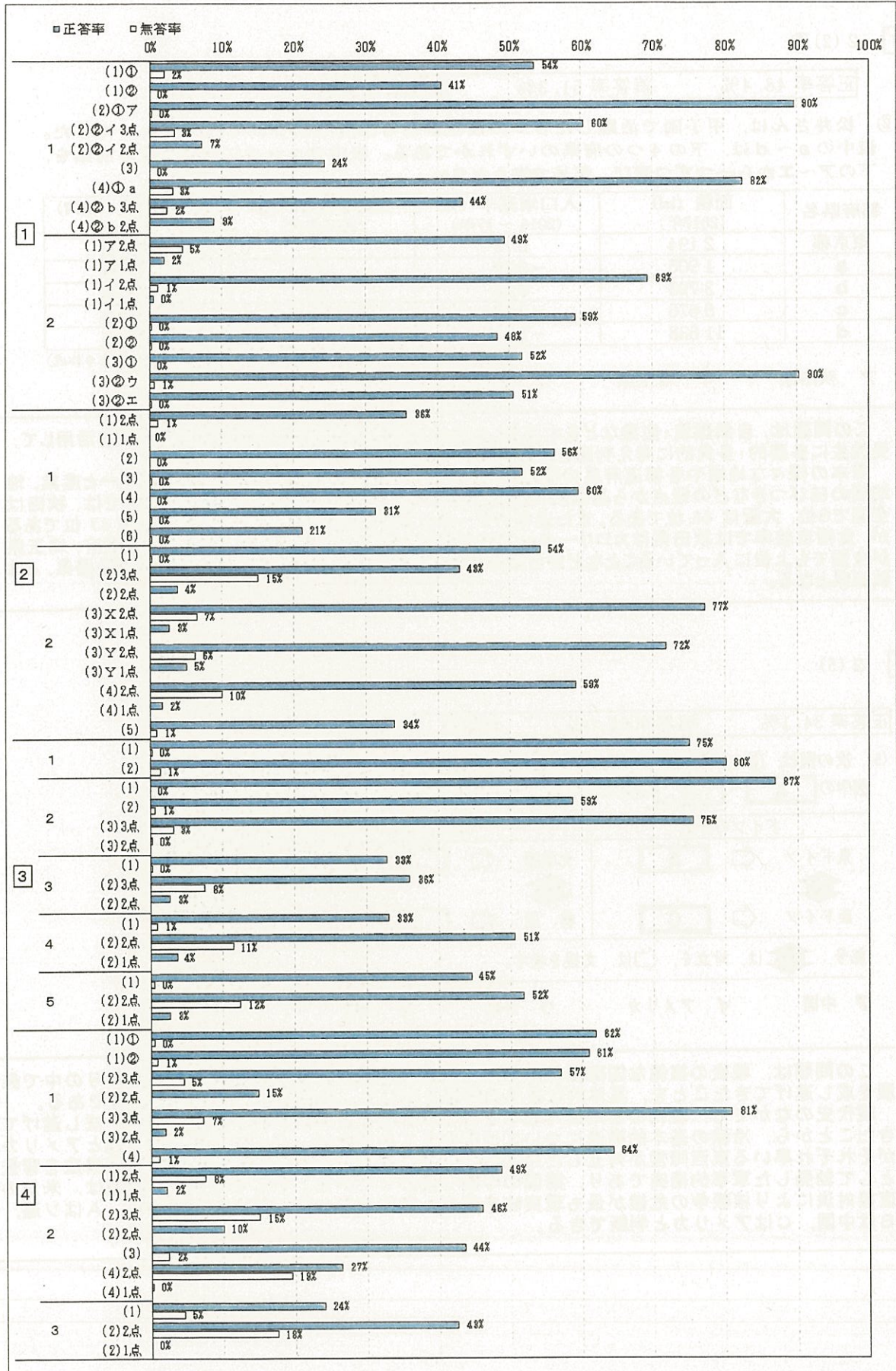
今年度は「SDGs（持続可能な開発目標）」をテーマに、1は「貧困や飢餓」、2は「気候変動」、3は「平等」を題材として、地理・歴史・公民の各分野から基礎的・基本的な内容を出題した。1の(3)のアフリカ諸国でヨーロッパ諸国の言語が使われることになった理由を記述する問題の正答率は81%と高かったが、2の(2)の貨物輸送から地球環境問題を考える問題の正答率は46%と低く、複数の資料から読み取った情報を、条件に従い関連付けて解答を作成する点に課題が見られた。また、2の(4)の国連の「総会」を答える問題は正答率が27%と低かった。

#### 5 指導の改善の視点

広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察することが、中学校社会科の基本的なねらいの一つである。そのため、地理的分野、歴史的分野、公民的分野の各々で、習得した知識を活用して、社会的事象について考えたことを説明したり自分の意見をまとめたりすることにより、思考力、判断力、表現力等が身に付いているかを確認する形式の問題を多く出題した。日頃の学習過程において、基礎的・基本的な知識の理解はもちろんであるが、一つの事象の意味や意義、特色や相互の関連などを意識し、社会的な見方・考え方を働かせながら学習に取り組むことが大切である。そして、よりよい社会を築いていくために様々な問題に主体的に関わっていこうとする資質を育成することが求められる。



6 平成31年度 正答率調査結果 (社会)



7 ピックアップ 社会

1 2 (2) ②

正答率 48.4% 誤答率 51.3% 無答率 0.2%

② 松井さんは、甲子園で活躍した5つの高校がある都府県について次の表をつくった。表中のa～dは、下の4つの府県のいずれかである。表中のa～dに当てはまる府県を、下のア～エから一つずつ選び、記号で書きなさい。

都府県名	面積 (km) (2017年)	人口増減率 (%) (2016～17年)	食料自給率 (%) (2016年度)	県内総生産 (億円) (2015年度)
東京都	2 194	0.73	1	1 043 392
a	1 905	-0.10	1	391 069
b	3 798	0.28	10	223 323
c	5 676	-0.79	37	49 155
d	11 638	-1.40	192	33 669

(「データで見る県勢」2019年版より作成)

ア 秋田県      イ 埼玉県      ウ 大阪府      エ 愛媛県

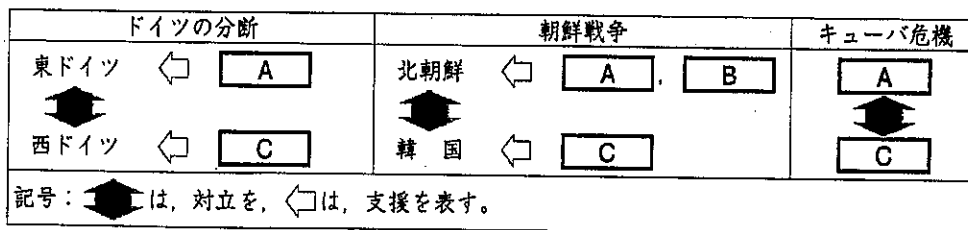
この問題は、自然環境・産業などを中核とした日本の地域的特色を、グラフなどの資料を活用して、受検生に多面的・多角的に考え判断させる問題である。

日本の様々な地域や各都道府県の特徴については、自然環境、人口、資源・エネルギーと産業、地域間の結びつきなどの観点から基礎的知識は押さえておきたい。例えば、面積の大きさでは、秋田は全国で6位、大阪は46位である。また近年のデータにおいて、人口増減率では秋田県は47位であるが、食糧自給率では秋田県はカロリーベースで全国1位である点、県内総生産額では大阪府、埼玉県が全国でも上位に入っていることなどから総合的に判断し、aは大阪府、bは埼玉県、cは愛媛県、dは秋田県となる。

2 2 (5)

正答率 34.1% 誤答率 65.0% 無答率 1.0%

(5) 次の図は、⑤の期間に起こったできごとについて、主な国などの関係を表したものである。図中の **A** ～ **C** に当てはまる国を、下のア～エから一つずつ選び、記号で書きなさい。



ア 中国      イ アメリカ      ウ 日本      エ ソ連

この問題は、戦後の複雑な国際関係の中で、日本が冷戦など世界の動きとのかかわりの中で発展を成し遂げてきたことを、具体的な事象の学習を通じて、受検生に考えさせる問題である。

現代史のなかでも、現代の日本は冷戦などの世界の動きとのかかわりの中で発展を成し遂げてきたことから、冷戦の基本的構造については押さえておきたい。ドイツの分断はソ連とアメリカがそれぞれ率いる東西陣営が対立した冷戦の象徴的出来事であった。朝鮮戦争は冷戦構造を背景として勃発した軍事的衝突であり、隣国の中国も関わっていた。そしてキューバ危機は、米ソの直接対決により核戦争の危機が最も現実味を帯びた事件であった。以上のことから、Aはソ連、Bは中国、Cはアメリカと判断できる。



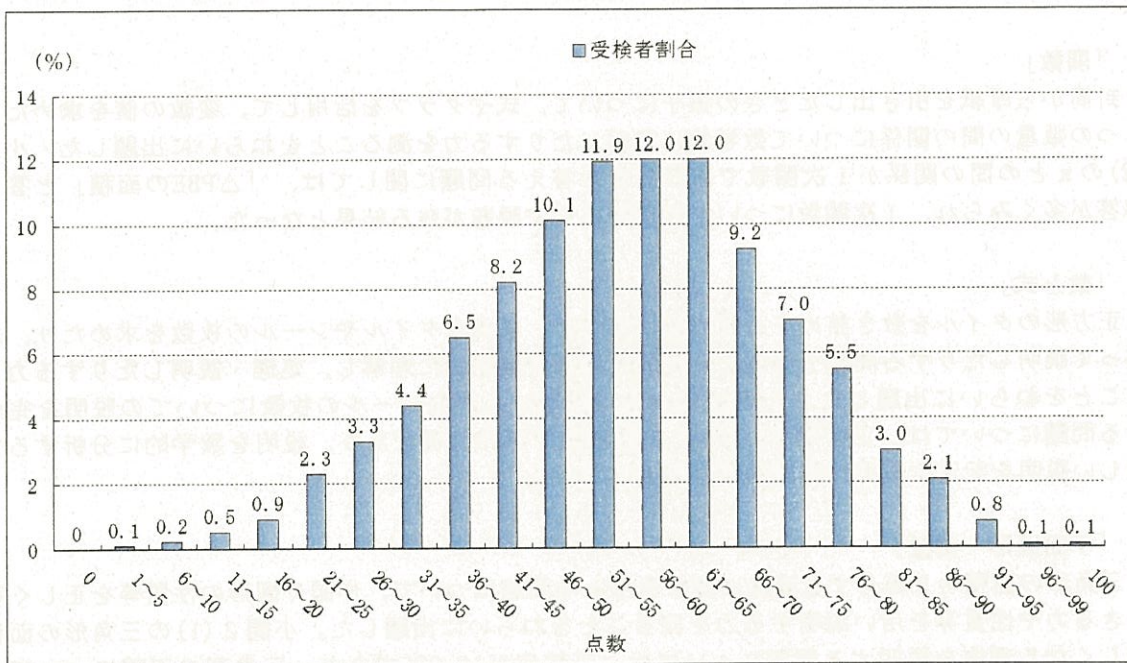
## ○ 数 学

### 1 出題のねらい、配慮事項

数と式・図形・関数・資料の活用の各領域にわたって、基礎的な概念・原理・法則の理解や、数学的に表現し処理する能力の把握に重点を置きながら、事象を数理的に考察する能力や数学を活用する態度が検査できるよう、次の点に配慮して出題した。

- ① 身近な課題に対して、主体的に解決する力が検査できるようにした。
- ② 知識や技能を活用して、問題を解決する力が検査できるようにした。
- ③ 複数の領域にわたって、総合的に考える力が検査できるようにした。
- ④ 思考過程や根拠などを論理的に説明できる力が検査できるようにした。

### 2 得点別に見た度数分布



### 3 平均点の推移

